

とはかけり、誠にさばかり群臣を玄たがへて、漢の高祖の文武にもおとらねど、我も陸機が頌にならひて、今は蕎麥切の徳をほむる也、

〔先哲叢談〕林恕一名春勝

略○中

續日本紀、養老六年七月、勸課天下、種樹晚禾蕎麥、繇是言、則世啖蕎麥也尙矣、意者當時獨給農食耳、其上下通用之、製殊極精巧、以代珍饌滋味者、蓋始于韃橐以來、春齋戲答惡煙酒文曰、近歲多嗜蕎麥、麵者、盛器成堆、放飯流歟、張口脹臉、滿腹擁喉、更十餘椀、果然不厭、非消麵蟲、則不及此乎、蓋是田舍野人之食也、然侯伯之席、文雅之筵、往往以是爲頓點、流俗之化、無奈之何、煙酒之行、既五十餘年、蕎麵之行、殆三十年、共是雖無益於人、亦無害者必矣、

〔蛻巖集後編〕謝坂倉之輔惠月洲別業蕎麥

吾聞三五良夜快霽秋、蕎麥花多結子稠、物理相感不可測、脆艸攀桂更風流、今年秋光偏海內、東邑西村處々收、矧又明月之洲別天地、千畦萬畛玉露浮、野性最嗜蕎絲麪、屈芟曾棗不足儔、紅節蠻椒點夥雪、白擦蘿蔔滿烏甌、一盤々々又一盤、老饕依然氣食牛、欣爾從來同斯嗜、秦越人棄腹胥猶遙念寒厨乏供給、簸颶新物煩惠投、卽今殘臘春風近、幻影迎歲添屋籌、願駕蘭舟臨墨水、快哉亭上賦重遊、月洲村在墨江西南若千步有亭名快哉

步有亭名快哉

〔二老略傳〕廣澤井○細酒を嗜すといへども、食品は酒人のごとし、淡泊を好む、敢て膏梁滋味を好みず、然れども松魚のさしみを好みて食し、河漏を常に嗜て喰ふ事絶へず、信州上州の人書を需るものあれば潤筆必ず蕎麥を以てする故、蕎麥數斗を貯ふ、三日に必一度は河漏を用るなり、鷄卵のふはくなどに、燒鹽或は雲丹を以爲鹽梅、

〔擁書漫筆〕ある人橘千蔭に標榜そほきよを書いてよとこへりしが、日をへて後せうそこして、河漏かのうをおくりければ、千蔭がそのかへしに、